

# わいどの村のキアンコウをトップブランドへ!!!

— 風間浦村キアンコウ単価倍増への取り組み —

風間浦村きあんこう資源管理協議

金田一 善唯

## 1. 地域の概要

私たちが住んでいる風間浦村は青森県下北半島北西部に位置し、津軽海峡に面し対岸に北海道を望む人口 2,500 人ほどの小さな村である (図 1)。

村の基幹産業は漁業であり、下風呂、易国間、蛇浦の 3 漁協を抱えている。また、観光業にも力を入れており、下風呂温泉を「下北ゆかい村」と称して、布海苔採り体験ツアーや元祖烏賊様 (いかさま) レース、イカ釣り漁業体験、海鮮まつり等の各種イベントを開催している。

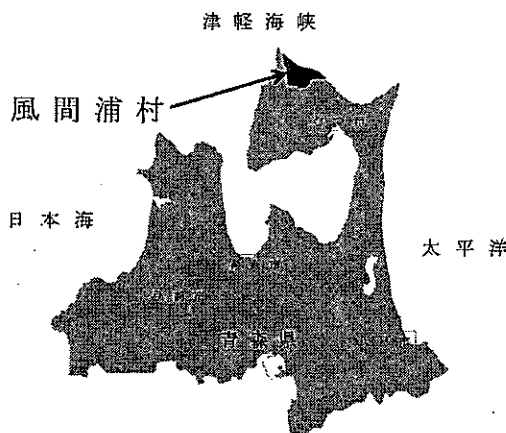


図 1 下北郡風間浦村の位置

## 2. 漁業の概要

風間浦村には下風呂、易国間、蛇浦の 3 漁協が存在し、組合員はそれぞれ 167 名 (組合員 89 名、准組合員 78 名)、184 名 (正組合員 46 名、准組合員 138 名)、132 名 (正組合員 119 名、准組合員 13 名) で構成されている。平成 20 年度の水揚げ数量はそれぞれ約 814 トン、約 458 トン、約 280 トン、村全体では約 1,552 トン、水揚げ金額はそれぞれ約 2 億 8,000 万円、約 2 億 1,000 万円、約 1 億 9,000 万円、村全体では約 6 億 7,000 万円となっている。魚類別に水揚げ金額を見ると (図 2)、イカ類の 3 億 516 万円に続き、キアンコウが 1 億

248 万円と、全体の 15.2% を占める。以下、タコが 6,127 万円、その他魚類が 1 億 1,414 万円、ウニ・アワビ類が 5,951 万円、海藻類が 3,073 万円と続く。これは、風間浦村におけるキアンコウ漁業に対する依存度の高さを示している。

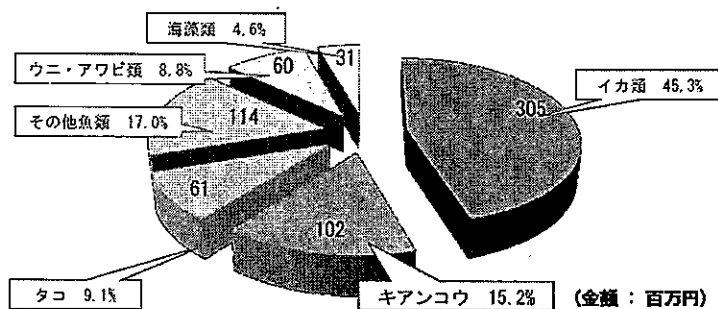


図 2 平成 20 年度の風間浦村の漁獲金額

### 3. 研究グループの組織と運営

平成 21 年 10 月、キアンコウの生態を解明しその資源管理を実践するために平成 17 年から標識放流事業を実施している漁業者を中心に、風間浦村きあんこう資源管理協議会（以下「協議会」という。）を発足させた。

協議会は、風間浦村管内 3 漁業協同組合（下風呂、易国間、蛇浦）、キアンコウ漁業者、研究会・青年部員、風間浦村、青森県下北地域県民局地域農林水産部むつ水産事務所（以下「むつ水産事務所」という。）等で組織している。オブザーバーとして、青森県漁業協同組合連合会、（地独）青森県産業技術センター下北ブランド研究所、下風呂温泉旅館組合、風間浦村商工会が参加し、観光、販売、流通、加工の面からその活動を支援している。

### 4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

青森県のキアンコウの水揚量は、平成 20 年に 958 トンと全国でもトップクラスに位置する（図3）。その中でも、風間浦村では、固定式さし網や空縄釣りと呼ばれる独自の漁法で漁獲されている。その水揚量も毎年 100 トンを超え、そのほとんどが生存した状態で水揚げされるという特徴を持つ。しかしながら、いずれも全国的な知名度は低い。

また、キアンコウの単価は、季節によって大きく変動するという特徴を持っている。冬場はキログラム当たり 1,000 円/kg 以上の高値で取り引きされるが、春になると 200 円/kg 強まで下落する。この原因は、キアンコウが主に冬場の鍋料理の具材として利用されるためである。

一方、風間浦村のキアンコウ漁業は価格の安い春漁への依存度が高く、特に 5 ～ 6 月は産卵期と考えられるため、私たちキアンコウ漁業者はその資源管理に対して強い危機感を抱いていた。

そこで、私たちは、資源管理型漁業を実践していく上でその生態を解明する必要があると考え、平成 17 年から標識放流を実施し、その移動と成長について調査した。

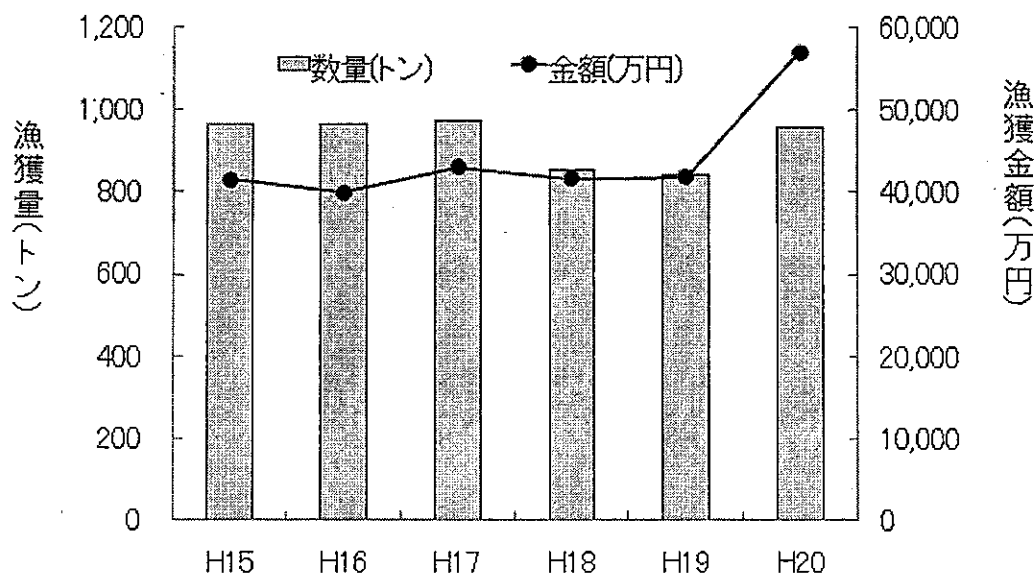


図 3 青森県のキアンコウ漁獲量及び漁獲金額の年推移

5. 研究実践活動状況及び成果（または効果）

(1) 標識放流

標識放流は、主に価格の安い春季に固定式さし網や空縄釣りによって漁獲された概ね 2 キログラム未満のキアンコウに対して、個体識別番号を刻印したディスクタグをビニールチューブで背びれ基部に結着する方法で実施した（図4）。

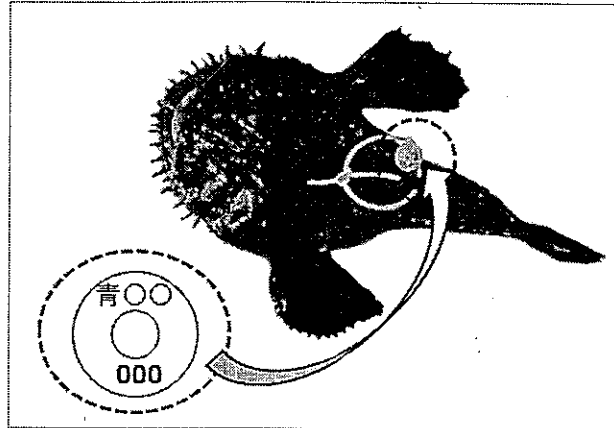


図 4 ディスクタグ標識の装着

放流数は、平成 17 ～ 21 年の 5 年間に、蛇浦漁協で 749 個体、易国間漁協で 283 個体、下風呂漁協で 189 個体、合計 1,221 個体である（表 1）。

表 1 風間浦村におけるキアンコウの標識放流及び再捕実績

放流年	放流時期	採捕漁法	全長 (cm) 範囲	放流 個体数	放流水深 (m)	再捕 個体数	再捕率 (%)
2005	5/27- 6/30	固定式さし網	34.7-57.0	144	18- 80	8	5.6
2006	3/16-12/20	固定式さし網	40.0-65.0	261	45-130	13	5.0
2007	1/22-12/21	固定式さし網	45.0-63.0	302	20- 80	10	3.3
2008	3/13- 6/11	固定式さし網	30.0-52.0	126	30-180	5	4.0
	5/28	空縄釣り	45.0	95	58	1	1.1
2009	6/12	固定式さし網	46.0	293	55	1	0.3
(合計)				1,221	18-180	38	3.1

また、われわれの取り組みを受けて、青森県農林水産部水産局水産振興課では「キアンコウ産地価格アップ事業」を開始し、その一環として全国の漁業者に再捕の報告を呼びかけるため、ポスターを作成して配布した（写真 1）。

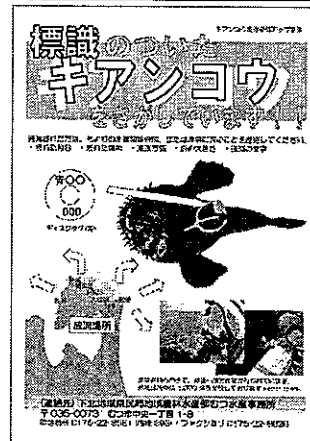


写真 1 再捕報告を呼びかけるポスター

その結果、合計 38 件の再捕報告があった(図 5)。うち 27 個体、71.1% は青森県内で再捕された。県外へは、北は北海道白老町虎杖浜沖、南は千葉県鴨川市小湊沖まで移動する個体もあった。特に、北海道白老町虎杖浜沖で再捕された個体は約 150km の距離をわずか 20 日で移動していた。

また、青森県水産総合研究センターが再捕データを解析した結果、その成長が極めて早いことが明らかになった(図 6)。放流時の体重 (x) と 6 ヶ月後の推定体重 (y) の関係は、

$$y = 1.1296x + 1.0476$$

という近似式で示すことができ、その相関も  $R^2=0.6118$  と高いことが明らかになった。

得られた近似式は即ち、放流時に 1.00 kg、2.00kg、3.00kg だった個体が、6 ヶ月後にはそれぞれ 2.18kg、3.31kg、4.44 kg に成長することを示している。

また、平成 18 年 6 月 5 日に蛇浦沖で放流した 1.07kg の個体が、180 日後の同年 12 月 2 日に同じく蛇浦沖で 4.80kg となって再捕されたことがあった。

この場合、キアンコウのキログラム当たり単価は、6 月の青森県平均が 244 円/kg、12 月の平均が 1,329 円/kg であることから、放流時に約 261 円だった個体が、半年後の再捕時には約 24 倍の約 6,379 円まで高価格化していたことになる。

これらの結果から、資源管理の取り組みを行うことによって、付加価値の向上を目指すことができると考えられた。

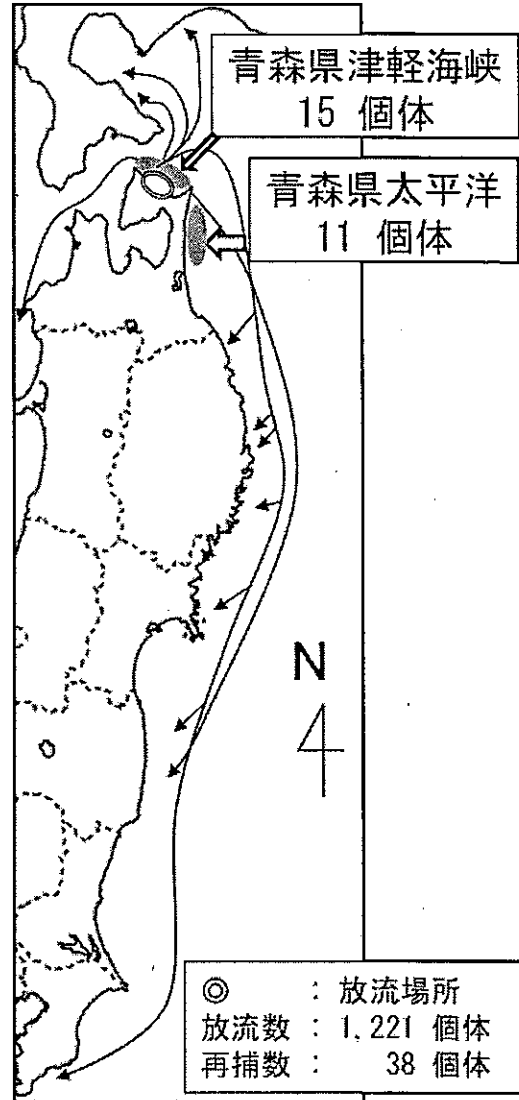


図 5 標識放流個体の再捕場所と個体数

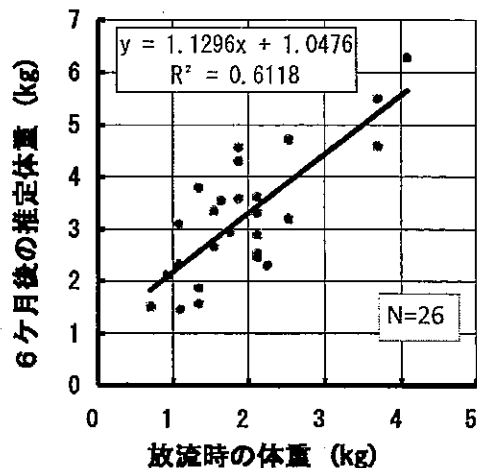


図 6 標識放流結果から算出された放流時体重と 6 ヶ月後の推定体重の関係

(2) 資源管理

平成 17 年から始まった標識放流を通じて、私たちキアンコウ漁業者の中では資源管理に対する意識が芽生え、自然と 2 キログラム未満の生存個体は全て再放流するようになった。また、それを受けた漁協側も 2 キログラム未満の個体を荷受けしない、という体制ができた。さらに漁業者自らが、6 月後半における操業の自粛等によって、価格の安い春漁から価格の高い冬漁へと移行が進んでいる (図 7)。

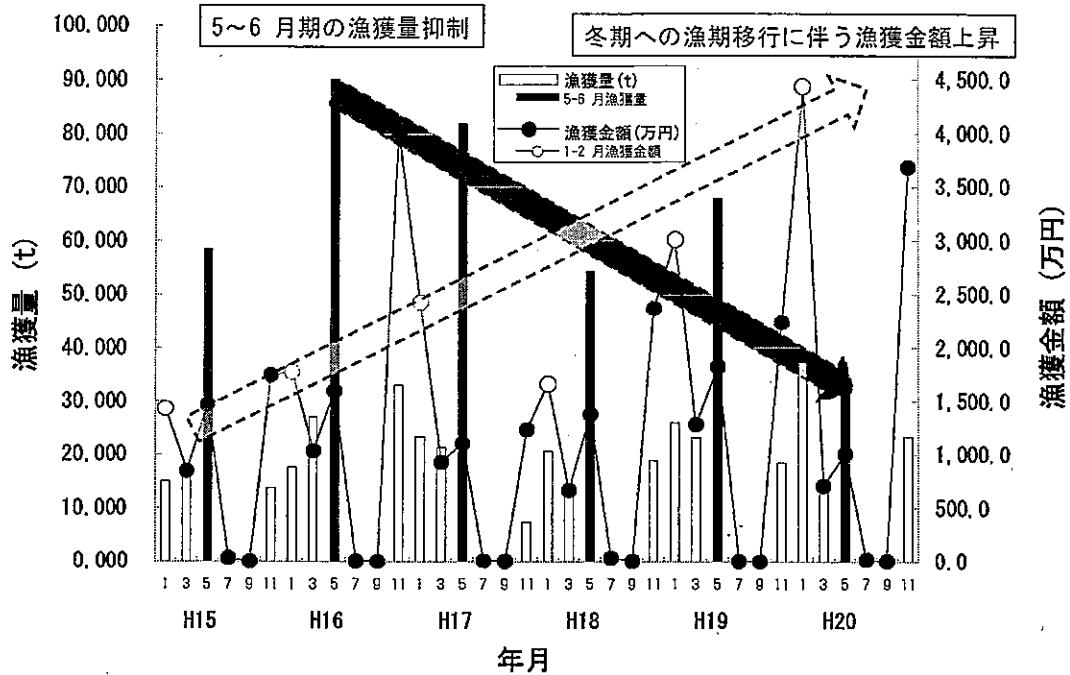


図 7 風間浦村におけるキアンコウの月別漁獲量と漁獲金額の推移

平成 21 年 10 月、私たちはこれらの活動を踏まえ、青森県や風間浦村、漁協等を交えて「風間浦村きあんこう資源管理協議会」を発足し、「全漁法において、体重 2 キログラム未満の生存個体を再放流する」という資源管理指針を決議し、その取り組みを県内はもとより、全国に向けて PR している。

(3) 単価の倍増、村民全員でブランド化へ!!!

これらの資源管理の取り組みを経て、風間浦村におけるキアンコウのキログラム当たり単価は、標識放流を開始した平成 17 年は 424 円/kg であったが、平成 20 年は 909 円/kg と、倍以上の単価に上昇した (図 8)。

青森県全体の平均は平成 17 年は 449 円/kg、平成 20 年は 596 円/kg であったことから、この単価上昇は風間浦村に特化していた。

魚価は複雑な流通システムによって形成されるため、その原因を特定することは難しいが、協議会では取り組みの結果として、小型魚の再放流により大～中型の個体がまとまったロットで流通したことと、価格の安い春漁から価格高い冬漁

へ漁期の移行が進んだことが大きな原因であると考えている。

資源管理は「手間がかかる」、「漁期が短縮される」、「禁漁区の設定によって漁場が制限される」等、私たち漁業者にとっては負のイメージも強かったが、実際に収益がアップしたことによって意識も変わり、多くの漁業者が積極的に協議会に参加し、資源管理の取り組みに協力するようになった。

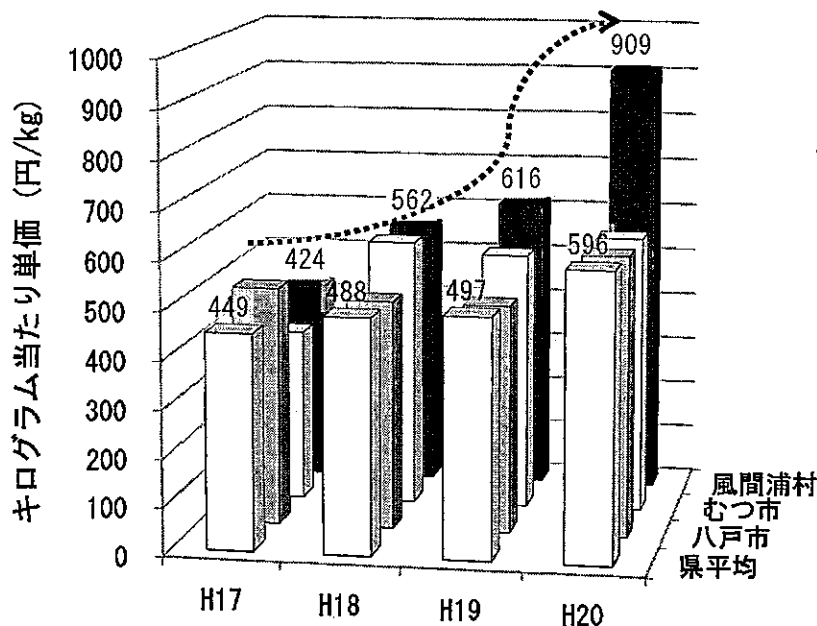


図 8 青森県における市町村別キアッコウのキログラム当たり単価の年推移

また、さらなるブランド化に向けて、村民全員による地域振興への活用も始まった。平成 22 年 1 月から、下風呂温泉における「下北ゆかい村鮫鯨祭り」を開催している(写真 2)。協賛宿泊施設では、前浜で漁獲された鮮度抜群のキアッコウを刺身、しゃぶしゃぶ、唐揚げ、ともあえ等のフルコースで振る舞う他、地元で代々受け継がれるさばき方「雪中切り」ショー等を実施している。これは現在、来年度の東北新幹線全線開通に向けた新しい観光資源として広く PR している。

これらの取り組みは、協議会に観光・流通業界関係者がオブザーバーとして参加して活発に意見交換することで、協議会活動そのものが村民全員参加による村おこし活動へと発展している。



写真 2 「下北ゆかい村鮫鯨祭り」で振る舞われるフルコース料理

## 6. 波及効果

この標識放流事業は、資源管理への取り組みが直ちに漁家収益の向上に繋がる好事例として新聞、ニュースによって広く報道され、風間浦村以外の下北地域全域に波及し、資源管理に対する意識向上に繋がっている（写真 3）。

平成 21 年 11 月までに、風間浦村、佐井村、むつ市及び東通村で固定式さし網、定置網等により採捕された約 2 キログラム未満の合計 1,468 個体が標識放流されており、うち 42 個体の再捕が報告されている。

さらに、(地独) 青森県産業技術センター下北ブランド研究所では、冷凍キアンコウ鍋セットの長期保存技術の開発、地元業者への普及に向けて研究を進めている。

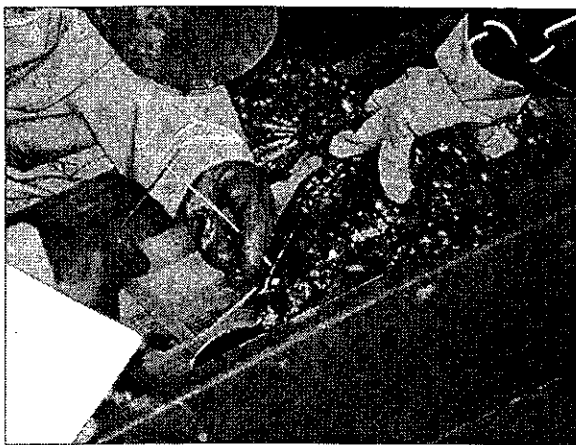


写真 3 小型のキアンコウに標識を装着する若手漁業者

## 7. 今後の課題や計画と問題点

風間浦村の基幹産業である漁業も、近年の燃油・資材費の高騰、慢性的な魚価安等によって厳しい経営を強いられている。そんな中、漁獲量が安定し魚価も上昇傾向にあるキアンコウはわが村の希望の光であり、村民全員参加の村おこし活動を活発化させていきたい。

今後はさらなるブランド化に磨きをかけて、全国的に PR 活動を展開していきたい。既にブランド化されている「茨城あんこう」や「下関アンコウ」等に追いつけ追い越せの精神で、青森県が推し進める「攻めの農林水産業」を実現していきたい。

「わいどの村のキアンコウをトップブランドへ!!!」

最後に、ご指導いただいた青森県水産総合研究センター資源開発部に深謝の意を表す。